

文体論の研究

豊田昌倫

近年、英国において文体論の Handbook や Companion があいついで出版され、昨年度も 80 篇の論考を収載した Michael Burke (ed.), *Stylistics*. 4 vols. 'Critical Concepts in Linguistics' (Routledge, 2017) が上梓されて、出版界は活況を呈している。

しかし、編者による 'Introduction' の第 1 文、'Stylistics is the linguistic analysis of style in *literary texts*'. を見て、いささか違和感を覚えざるをえなかった。'Introduction' の副題も、'Stylistics: the linguistic analysis of style in *literary texts*' とある。読者によってはこの定義に対して疑問を抱くのではないか——。こうした限定をつければ、文体論は *literary stylistics* ということになり、文学作品以外の文体研究を排除することになるのではないか。分析の対象を限定することなく、広く言語における style の研究を行うのが文体論ではなかったか、と。

個人的な感慨が許されるならば、文体論に関心を持ち始めたころ、その魅力は言語学の一部門としての領域の広さにあった。小林英夫による文体論の構想、Max Deutschbein (東田千秋訳) 『名詞構文と英語』(1958)、Roman Jakobson, 'Closing statement,' Thomas. A. Sebeok (ed.), *Style in Language* (1960) など、たまたま手にした文体論に関する書物が開く新鮮で壮大な言語世界。特定の方法論に基づくことなく、style に鋭く迫る文体論の可能性は、限りなく広いように思われた。事実、当時の代表的な入門書、David Crystal & Derek Davy, *Investigating English Style* (1969) では、'Conversation; Unscripted Commentary; Religion; Newspaper Reporting; Legal Documents' が分析の資料にあげられていた。とくに外国人の研究者・学習者にとって、口語と文語にわたる多様なテキストを対象とする分析の意義と価値は、今なお失われていないはずだ。その意味では、対象を限定することのない、Lesley Jeffries & Dan McIntyre, *Stylistics* (Cambridge University Press, 2010) の定義、'sub-discipline of linguistics that is concerned with the systematic analysis of style in language and how this can vary according to such factors as, for example, genre, context, historical period and author' を取りたいところである。

Burke が文体論の対象を文学作品に限定した理由としては、Peter Verdonk を師と仰ぐ彼自身の関心、近年の文体研究の大多数が文学テキストを扱うという事実、さらにその傾向を助長する要因に、英語文体論では最大の国際学会である PALA (Poetic and Linguistic Association) のジャーナル名が、*Language and Literature* であること

文体論の研究

もあげられよう。

これに対して、日本における文体論には、このような文学作品への極端な偏りは見られない。たとえば、堀正広編『コーパスと英語文体』（ひつじ書房、2016年）に収められているテキストは、『カンタベリー物語』、Charles Dickens, Mark Twain, 新渡戸稲造著 *Bushido*, 首相と大統領のスピーチ、および英国の大衆紙と高級紙であり、詩、小説とそれ以外の資料が過不足なく選択されている。文体論が本来の活力を維持して発展するためにも、アプローチとこうした言語資料の多様性を保持したいものである。

Burke 編 *Stylistics* は全4巻、総計1572ページで構想され、すでに公刊された書物の一部および学会誌などの研究論文が採録されている。各巻の構成は次のとおりである。Vol. I: Theory, Method and History; Vol. II: Pragmatics, Discourse and Narrative; Vol. III: The Practical Value of Stylistic Analysis; Vol. IV: The Multidisciplinarity of Stylistics. Vol. I に収められている論考の著者は、Roman Jakobson; M. A. K. Halliday; Stanley E. Fish; Michael Toolan; Roger Fowler; H. G. Widdowson; Mick Short & Willie van Peer; Ronald Carter; Sonia Zyngier, Willie van Peer & Jemeljan Hakemulder; Katie Wales など、英米における文体論の展開をたどることができる。Vol. II 以降は隣接科学の影響を受けた最近の多岐にわたる文体研究が、*Language and Literature*, *The Journal of Literary Semantics*, *Style* などの雑誌から再録され、日本人研究者では、Raymond Carver を対象とする Keiko Arai, および ‘free indirect discourse’ をめぐる Reiko Ikee の論考が、いずれも Vol. II に選ばれている。ただ、とくに Vols. I, III では、既存の選集 Jean Jacques Weber (ed.), *The Stylistic Reader: From Roman Jakobson to the Present* (1996), Mick Short (ed.), *Reading, Analysing, and Teaching Literature* (1988), および Michael Burke, Szilvia Csabi, Lara Week & Judit Zerkowitz (eds.), *Pedagogical Stylistics: Current Trends in Language, Literature and ELT* (2013) などとの重複が多く、とりわけ Peter Stockwell & Sara Whiteley (eds.), *The Cambridge Handbook of Stylistics* (2014) から連続する5論文が同一配列で再録された編集方針には疑義が残る。

Sylvia Adamson のための記念論集、Anita Auer, Victorina González-Diás, Jane Hodson, & Violeta Sotirova (eds.) *Linguistics and Literary History: In honour of Sylvia Adamson* (John Benjamins, 2016) が上梓された。Leo Spitzer (1962) の記念すべき文体論と同じ書名が選ばれたのは、Spitzer とおなじく historical stylistics を志す Adamson の学風を反映したものであろう。10篇の論文の中でも、とくに Violeta Sotirova, ‘Dismantling narrative modes: Authorial revisions in the opening of *Mrs Dalloway*’ および Mick Short, ‘Stylistics and “He Wishes for the Cloths of Heaven” by W.B. Yeats’ の鋭利な文体分析は興味ぶかい。Joan C. Beal や Mel Evans による

回顧と展望

異色のエッセイも、碩学 Adamson を寿ぐ祝宴に色を添えている。

日本から発信された貢献としては、まず Saito Yoshifumi, *Style and Creativity: Towards a Theory of Creative Stylistics* (ひつじ書房, 2016年)をあげたい。本書は 1 History of Stylistics; 2 Theory of Stylistics; 3 Rearrangement of the Principles of Stylistics; 4 Theory of Creative Stylistics; 5 Practice of Creative Stylistics; 6 Conclusions and Suggestions for Further Research の6章で構成されており、著者の本領が発揮されるのは、第1-3章における文体論の歴史と理論を概観した後の第4-5章である。第4章では creativity から 'creative language awareness' および rhetoricなどを論じて、Intention; Message, theme, or motif; Setting and characterization; Narrative structure and point of view; Tense and time-shift; Syntactic choice, Lexical choice; Phonological choice; Graphological choice; Cohesion, coherence, and overall textual patterning というチェックリストが提案される。第5章はその実践編で、著者による 'Cloud and Water' と題する文章が紹介される。'product' としてのテキスト分析を目的とした文体論に対して、テキストを生み出す 'process' に目を向ける、魅力的な creative stylistics の誕生である。

Masako Nasu, *From Individual to Collective: Virginia Woolf's Developing Concept of Consciousness* (Peter Lang, 2017) では、題名が明示するように、'pursuit of the individual' から 'pursuit of the collective' へ移行・転換する過程が、*The Voyage Out* から *Between the Acts* にいたるまで作品を追って丹念にたどられる。まず、'focalization and speech and thought'; 'internal monologue'; 'narrative perception'; 'psycho-narration'; 'an unspecified subject' など分析の枠組みが設定され、'internal realism' の模索、確立、そして限界、'Mrs Dalloway in Bond Street' と *Mrs Dalloway* における 'internal realism' などが論じられ、2編の短編小説 'The Lady in the Looking-glass: A Reflection' および 'The Fascination of the Pool' における 'focalizer one', および *The Waves* の2つの草稿に見る 'the mind' の用法など、随所に展開される文体分析も説得力に富む。

御興哲也・新野緑・吉川朗子編『言葉という謎——英米文学・文化のアポリア』（大阪教育図書、2016年）には、小説の文体に関する論文が少なくない。御興哲也「反復する「ストローク」——『灯台へ』でリリーが得たもの」は、主として反復やリズムの観点から Woolf における語りの本質を説き明かす。そのほかにも、石川玲子「反転し続ける意味——『幕間』の「窪地」をめぐる」、榎千恵「『蠅の王』における自然描写」、長柄裕美「カズオ・イシグロの作品に見る言葉とその余白」、難波江仁美「複声で語る、アメリカの風景——ヘンリー・ジェームズ「幽霊貸家」の一人称語り」など。

菊池繁夫・上利政彦編『英語文学テキストの語学的研究法』（九州大学出版会、2016年）は、文学作品を語学的に読み論じるための有益な指南書。第1部「文学テキスト

文体論の研究

を語学的に読むとは」、第2部「文学テキストを語学的に読む：論文解題」、第3部「文学テキストの語学的研究の試み」、第4部「歴史辞書を読む」で構成されている。もっとも紙幅が割かれているのは第2部であり、菊池繁夫、Geoffrey Leech、Michael Toolan、および Jean Boase-Beier による解題がある。2014年に急逝した Leech の‘The best of the bunch: Ten articles on literary stylistics’は彼の遺稿ではないだろうか。Leech は‘Closing statement’ by Roman Jakobson (1960) で始めて、‘Is style in short fiction different from style in long fiction?’ by Michael Toolan (2013) で終止符を打つ。第3部には「ジェイムズ・ジョイスの『ユリシーズ』と2人の歩くキャンドル」(菊池繁夫)、「詩語の継承と排除——マロリーの用語に関して」、「モデルとテキスト——『トテル詩選集』翻訳詩から」など(上利政彦)、第4部には「語学研究における辞書の役割——初期の英語辞書を中心にして」(和田章)が収められている。

前述の『コーパスと英語文体』には次の論考が収められている。堀正広「コーパスと英語文体研究」、中尾佳行・地村彰之『『カンタベリー物語』の写本と刊本における言語と文体について」、田畑智司「共著作品における Dickens の文体」、西尾美由紀「The Dickens Lexicon Digital とその活用研究」、竹下裕俊「電子コーパスを利用した Mark Twain のコロケーション研究」、堀正広「新渡戸稲造著 *Bushido* の英語」、瀬良晴子「首相の言葉、大統領の言葉」、高見敏子「BNC に見る英国の大衆紙と高級紙の形容詞」。コーパス研究では、コーパスによる事例の発掘・提示そのものが目的とされる事例もあるが、本書の諸論文ではいずれも「結果の解釈」への意識が高く、たとえば、中尾・地村論文では、「ヴァーギュールの位置の違いは HG (Hengwrt) では認識的意味を前景化し、EL (Ellesmere) では対立的に意思的な意味を前景化している」と述べられている。また、堀論文は、*Bushido* における表現の多様性とユニークなコロケーションを指摘する。瀬良論文では、語レベルの二元論、キャッチフレーズ、助動詞 *must* などが分析対象であるが、「政治家の演説の上手下手を評価するより、演説において政治家が何を約束し、何を実行してくれそうなのかを判断することの方が重要である」と結ばれ、安易な評価を避ける論者の態度が明確に示されている。

文体論の英語教育への援用を目的とした、豊田昌倫・堀正広・今林修編『英語のスタイル——教えるための文体論入門』(研究社、2017年)の掲載論文は次のとおりである。豊田「スタイル(文体)とは何か」、今林修「スタイル(文体)から英語学習を見直したい」、豊田「音にはスタイルがある」、野村恵造「語の選択とレジスター」、堀正広「コロケーションとスタイルと英語学習」、菊池繁夫「文のスタイル」、豊田「会話の英語とは」、山崎のぞみ「会話のスタイル」、椎名美智「^{ポライトネス}丁寧さのスタイル——アリスとハリーのおしゃべりに注目して」、瀬良晴子「スピーチのスタイル」、山口美知代「映画で学ぶ会話のスタイル」、阿部政彦「文体に注意を払って読むとは」、魚住香子「学習者用読み物 (graded readers) のスタイル」、高見敏子「新聞・雑誌のスタイル」、佐々

回顧と展望

木徹「小説のスタイルをどう教えるか」、中川憲「詩のスタイルをどう教えるか」、富岡龍明「英作文とスタイル」、奥聡一郎「e-mailのスタイル」、竹下裕俊・堀正広「アカデミック・ライティングとは」、野口ジュディー「科学論文のスタイル」、斎藤兆史「創作英作文——理論と実践」、今林修「読書案内」。

なお、単著としては、大園弘『カポーティ小説の詩的特質——音と文彩』（春風社、2016年）が出版され、「韻律効果」「(-)like”を用いた直喩表現」「強意的直喩」「比喩標識“as if (/ as though)”」「隱喩表現」などについて、例文に即して考察が行われ、カポーティの文体特徴が提示されている。

最後に国内の主な研究論文を列挙しておく。宮川美佐子「*The Master of Ballantrae*の“an Exquisite Balance”——ロマンスとリアリズム」（京大英文学会、*ALBION*、復刊第62号）、天野みゆき「ジェイン・オースティンの語りの技法——『説得』における感情表現、身体性と演劇性」（広島大学英文学会『英語英文学研究』第61巻）、Tatsuro Tanji, ‘Stephen’s Strategy in *Ulysses*’（中央大学英米文学会『英語英米文学』第57号）、合田典世「“The floor of the mind”——『灯台へ』のインターフェイス」（*ALBION*）、佐藤彩音「*A Room with a View*における水の表現について」（共立女子大学大学院、*KYORITSU REVIEW*, No. 45）、豊田昌倫「スタイルとリズム——Thomas De Quincey, *Confessions of an English Opium-Eater* 考」（『現代英語談話会論集』第12号）、大園弘「カポーティ小説における押韻形式の多様性」（九州国際大学教養学会『教養研究』第23巻第2号）、笠本晃代「*Vera: or, The Nihilists*における親族名称と個人名の使用について」（活水女子大学大学院、*KWASSUI ENGLISH STUDIES*, No. 24）、堀田知子・稲木昭子・沖田知子「『検察側の証人』のメタ語用論的分析」（『龍谷紀要』第38巻第2号）、竹田友子「樹木を介した欲望の表出と変身願望——ロバート・ヘリックとアフラ・ベーン」（『英語英文学研究』）、末岡ツネ子「『序曲』における「愛」の概念——動詞“Love”から詩人ワーズワスの愛の対象を考察する」（『安田女子大学大学院紀要』第22集）。

（京都大学 / 関西外国語大学名誉教授）